

# 第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

一般の部 優秀賞 受賞作品

お借り申します

東京都

石井 泰子

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

お借り申します

石井 泰子

物心ついたところから『おハナさん（私の祖母）の腰巾着』と言われて育った。まだ口もろくに回らないうちから、ちよこまかと祖母の後をついて歩いては、やることなすこと真似をする、相当にこまっちゃんくれた子供だった。

別に両親が居ない訳でも不仲である訳でもなかったが忙しきにかまけて、私の世話は大方が祖母の役目であった。

昔から爺婆っことは三文安と言われるほどに孫を甘やかすが定説だが、私の祖母に限ってはそんなことはなく、じつにメリハリの効いた愛情の注ぎ方をしてくれた。

兄弟姉妹が取っ組み合いの喧嘩をした時など、全員を一行に並べて、竹製の長い物差しがささらになるほど肩を叩かれて反省させられた。まるで禅寺の警策である。

また、「頭は帽子を被るためにあるんじゃないんだよ。何でもよく考えて工夫をしなくちゃいけないよ」が口癖であった。

現在では夢のまた夢だが、私が子供のころは近くの小川に蛍が乱舞するなどはどこにでもある風景であった。「明日はみんなで蛍狩りに行くよ」と祖母から号令がかかると、手先の器用な私は徹夜して麦わらの苾（ストロー）で蛍籠を編んだ。祖母はその出来映えを誉めそやしてくれた。正式な名前は知らないが、そのころ蛍草と呼んでいた雑草を籠に敷き詰めて捕まえた蛍を入れて家に持ち帰った。

その夜は兄弟姉妹であっち引つ張りこっち引つ張りして苦労しながら蚊帳を吊り、捕まえてきた蛍を放って光の明滅を楽しんだ。こんな工夫も祖母をことのほか喜ばせた。

四十代で未亡人になって、再婚もせずに子供を育て上げた明治生まれの祖母は、常に凜とした人で、亡くなるまで着物の衿ひとつ乱さなかった。

祖母を送ってから半世紀が過ぎたが、今でも忘れられない言葉がある。忘れられないというよりは、私の体に刷り込まれたものといった方がいいだろうか。

その言葉は『お借り申します』

祖母はまだおむつも取れない私の手を引いて、よく近所の親戚にお茶のみに行った。普通に行けば、石ころだらけの村道をぐるりと大回りしなければならぬ。それは幼児にとつてかなりきついことであった。が、ほんの少しだけ他人様の私道を通らせてもらえば、土地の人々が鎮守様と呼んで大切にしている神社の境内に出ることができる。親戚の家はこの鎮守様の山門の真ん前なのである。

この私道は何時から公道化していて、誰もが当たり前前の顔をして通り抜けている。その持ち主もとうの昔に転居して無人の家の前の細道である。だが祖母は私道の入口で、きちんと立ち止まって頭を下げ「お借り申します」と言うのである。

何でも真似をする私も頭を下げ「おかりもうちまちゅ」と繰り返す。

鎮守様の境内を突っ切る時も「お借り申します」「おかりもうちまちゅ」をしてから通り抜ける。帰り道も当然である。

私は小学校を卒業するころまで何の疑いもなく、祖母がしたように「お借り申します」と声に出して言っていたが、悪童から「なんだよ、それ？ 馬鹿じゃねえの」と悪態をつかれ

てからは、声には出さなくなった。

中学生になったころ、古くなった自宅を建て直すことになった。地鎮祭の日も祖母は深々と頭を下げて「お借り申します」と言った。

生意気盛りだった私は祖母に詰め寄った。

「おばあちゃん、自分の土地に自分のお金で家を建てるのに、何でお借り申しますなの？」祖母はちよつと困ったなという顔付きで話し出した。

「今はたまたまうちの名義になってはいるけど、土地なんてものは元々は誰のものでもないのよ。しいて言えば、地球を作った神様のものかなあ。それを人間が使わせてもらうんだから、感謝の気持ちでそう言うのよ」

「うへーっ！ 田舎のおばあちゃんの言葉とは思えないほど壮大な話になっちゃうんだね」私は雑ぜつ返してから先を続ける。

「いつもそんな気持ちで言ってたの？　　そういえば、畑に種を蒔く時も、田んぼに水を引く時も言ってるね」

「口で説明すると、偉そうで、大層で、突拍子もないことを言っているように聞こえるかもしれないけど、おばあちゃんみたいに思っている人は大勢居ると思うよ。日の出に手を合わせてお辞儀をしている人を見かけることがあるでしょう？　　あれも自然に感謝する心でしているはずよ」

中学生の私には、祖母の気持ちの百分の一も理解することはできなかった。

しかし、耳に心地いい言葉として『お借り申します』は心の奥深くに入り込んだまま何時しか忘れて半世紀が過ぎた。そして今、私は田んぼも畑もない東京で暮らしている。

ここ五十年の世の中の変化は目を見張るばかりで、生活の全てが便利になった。

が、その一方で、温暖化で氷山が解け出したとか、観測史上最大の集中豪雨だとかという出来事が次から次へとやってくる。

テレビでは地球が悲鳴をあげていると学者が警鐘を鳴らしている。便利さと環境破壊は背中合わせだと力説する先生がいる。これを見聞きしながら昔聞いた祖母の言葉『お借り申します』を思い出した。

何と謙虚で美しい言葉だろうか？　　当時の私は子供とはいえ、祖母の大真面目な感慨を茶々を入れながら聞いた不心得を恥じながら、泉下の祖母に話しかけてみる。

「おばあちゃん、五十年も前に凄いいこと言っていたのね。今こちらでは、やりたい放題のツケが回ってきて大変なことになっています。たまたま天然の蛍が飛んだということがテレビのニュースになる時代です。それほどに、環境が変わってしまった。

私はこの歳になって、やっとおばあちゃんの自然に対する畏敬の念が少しわかったような気がしています。あの時は半畳を入れてごめんなさい。

そういえば、一週間くらい前、おばあちゃんが喜びそうなことに出くわしました。

羽田空港が見える、多摩川河口の遊歩道を散歩していた時のことです。私の前を犬を連れられた六十がらみの男の人が歩いていました。その人は道の真ん中に自分の犬が糞をしたのに片付けもせずにしたすた歩いて行くんです。すると、向こうから歩いてきた、これも犬を連れられた二十代くらいの男の人が足を止めて言い放ったんです。

『オジサン。自分の犬の糞くらい自分で始末しなよ。道路は自分のものじゃないんだからさ。みんなで使わせてもらってるんだよ。オジサンみたいな人がいるから、犬を飼っている

人が悪く言われるんだよ。今日は俺の新聞紙とビニール袋あげるからこれで始末して帰ってね』

それだけ言うと、とつとと離れて行ったの。世の中そんなに捨てたもんじゃないなと思っ  
て気持ちが清々しました。ねっ、ちよつといい話でしょう？ 私は誰にもなく『お借りし  
ます』と声に出して言ってみました。五十年前のおばあちゃんのあの口調で……」